

## 会員の広場



### 異文化交流に学ぶ

松下 滋 (東京)

私は、三和銀行・三和総研でエコノミストとして働いていた。今は個人ベースで動いているが、いろいろな異文化交流に参画して、情報の受・発信を行うような心がけている。そのひとつに、「政策分析ネット・ワーク」というのがある。

政策課題を議論し、人的交流をはかるプラットフォーム・フォーラム。土曜の午後、都心に集まる。テーマはマクロ政策、産業政策、社会保障改革、働き方改革、地域振興、食文化、大学院教育まで、多岐にわたる。事務局から登録メンバー全員に案内がメール発信され、テーマ毎に毎回200人位が参加する。メンバーは、企業、大学、シンクタンク、官庁、地方自治体、メディア、NPOなどの政策担当者。1999年に旧三和総研が事務局になって充足いまは別のオルガナイザーが担当しているが、発起人の一員だったので時々顔を出す。

この会は、メンバーが30~40歳代と若い。問題提起する講師も、しばしば若い人達が登場する。半分くらいの年齢の人々の中に数時

間身を置くと、その熱気に圧倒される一方で、新鮮な刺激を貰える。女性の参加者が目立つ。男女半々の時もある。母は英語教師やいくつかの団体の役員を務めた「職業婦人」だったが、ここでは颯爽とした現代キャリアウーマンの働きぶりを観察できる。

議事進行に、新機軸を発見することもある。パソコンを苦にしない司会者の場合、ボードに彼のアドレスを大書し、質問をメールで発信するよう予め聴衆に求める。参加者は、パソコンを使って講演をメモしつつ質問を司会者宛てに発信する。講演が終わりQAの時間になると、司会者が代表して質問する。「最も多かった質問」「次に多かった質問」「ユニークな質問」と、手際よく整理して講師に質

問を投げかける。饒舌な質問で時間を浪費されることなく、係員がマイクを持って走り回る必要もない。パソコンで質問できない技術不足を嘆きつつ、討論会の進化振りに感心させられる。

「坂の上の雲」の時代、南満州鉄道の初代総裁・後藤新平が重用したのが調査部だった。特徴は、歩く、人に会う、身体で感じる、徹底した実地調査「草柳大蔵「実録・満鉄調査部」。実地調査と思考の掛け合わせ。この姿勢を私はずっと、自分のエコノミスト活動の手本にしてきた。最近は今々国内を歩く程度になってしまったが、「人に会う」スタンスだけは、経済倶楽部への参加を含め、仕事を続ける糧として維持したいと思っている。